

SHOW HEY シネマルーム

ミーシャ ホロコーストと白い狼	
2007年・フランス、ベルギー、ドイツ映画 配給/トルネード・フィルム・119分	
2009(平成21)年6月13日鑑賞	テアトル梅田

Data
監督・脚本・脚色：ヴェラ・ベルモン
原作：ミーシャ・デフォンスカ『ミーシャ ホロコーストと白い狼』(ミュゼ刊)
出演：マチルド・ゴファール/ヤエル・アベカシス/ギイ・ブドス/ミシェル・ベルニエ/ベンノ・フコルマン/アンヌ・マリー・フィリップ/フランク・ド・ラ・ペルソヌ

👁️👁️ みどころ

ナチスドイツによるユダヤ人大虐殺(=ホロコースト)を描く新たな名作が登場! 主人公は8歳の少女ミーシャだが、なぜ彼女は一人東への旅へ? 本来は明るい色の長い髪と、強い意思力を持った目の力に注目! そして助演(?)は、オーディションで選ばれた白と黒と赤色の狼たち。少女と狼は厳しい原野の中でどんな絆を? 大人が観ても感動モノだが、感受性の強い子供たちこそ、是非こんな映画を!

* * * * *

原作に注目! 知らなかったのは私だけ?

ナチスドイツによるユダヤ人狩り(=ホロコースト)を少女の視点から描いた永遠の名作は、アンネ・フランクが書いた『アンネの日記』。これに対して、ミーシャ・デフォンスカが書いた『ミーシャ ホロコーストと白い狼』は、ユダヤ人狩りによって東へ連れて行かれた両親をたずねて、主人公の少女がたった一人ベルギーから東へと旅していく姿を描くもので、世界17カ国で翻訳されたベストセラー小説。この小説の特徴はタイトルどおりそこに白い狼が登場し、少女と狼との絆が描かれること。いわば、児童文学の名作『ジャングル・ブック』(1894年)の少女版(?)だが、本作にみる狼とミーシャとの絆にビックリ。

そんな世界的な名作があることを全然知らないまま、私は『ミーシャ ホロコーストと白い狼』という映画は何の映画? と劇場に問い合わせしていたのだから、世界的標準に照らして日本人の知識不足(私だけ?)は明らか?

ホロコーストの悲劇を、あの名作とは違う視点から

ナチスドイツによるユダヤ人虐殺（ホロコースト）を描いた名作は多い。09年2月14日に観た、亀田三兄弟ならぬユダヤ人三兄弟（トゥヴィア、ズシュ、アザエル）の活躍を描いた『ディファイアンス』（08年）も良かったが、私が断然、第1、2位を争う名作として推薦するのは、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）と、『ライフ・イズ・ビューティフル』（98年）（『シネマルーム1』50頁参照、『シネマルーム1』48頁参照）の2つ。

両者とも涙なくして観られない名作だが、本作はそのサブタイトルどおり、少女ミーシャと白い狼が登場する、かなり変わったホロコーストの一風景。つまり本作は、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』や、『ライフ・イズ・ビューティフル』のような悲しい結果に涙するホロコースト映画ではなく、父母をたずねて一人旅を続け、狼と共に生活をするという8歳のユダヤ人少女ミーシャの力強さと奇跡的な旅の姿に感動する異色作だ。



Stephan Films Les aventuriers de l' image XO Productions Inc.
(France) Saga Film (Belgique) Dalka - Zuta Film
Produktion (Allemagne) 2007

オーディションで選ばれた少女のオーラは？

最近観た子役の少女で印象深かったのは、『ぜんぶ、フィデルのせい』（06年）で9歳の少女アンナを演じたニナ・ケルヴェル（『シネマルーム18』94頁参照）だが、本作の主人公である8歳の少女ミーシャを演じるマチルド・ゴファールの印象も強烈！

自らもロシアとポーランドの血をひいたユダヤ人女性であるヴェラ・ベルモン監督が、ミーシャ・デフォンスカの原作と出会い、その映画化を決意したのは、まさに宿命のようなものだったらしい。そんなヴェラ・ベルモン監督がオーディションでミーシャ役の少女に要求したのは、髪の色が明るいことと目の色が明るいこと。そして、「それなら私にピッタリ！」とばかりに応募したマチルド・ゴファールが、1000人以上の応募者の中から選ばれたのだから、マチルド・ゴファールの放つオーラは相当なもの。

もっとも、彼女の自慢の明るい髪の色はベルギーの首都ブリュッセルで父親ロイヴン（ベンノ・フュルマン）、母親ゲルーシャ（ヤエル・アベカシス）と一緒に暮らしている間は、ユダヤ人狩りの恐怖に脅える毎日とはいえ美しかったが、本作のメインとなる中盤から後半にかけての苦難の一人旅においては伸びっぱなし、汚れっぱなし。したがって、本人はもちろん観客も、その美しい髪の色を鑑賞する余裕は全くない。また明るい目の色も、家族と共に幸せに暮らす少女の明るい目の色ではなく、荒野の中で食料品を探し、盗み、狼たちと共に生きていく野生の目。しかし本作では、そんな少女のオーラに注目！

狼のオーディションは世界初？

他方、ホンモノの狼に馴染みのない私たち日本人には狼と犬の区別は全然できないが、本作に登場する雌の白毛の狼と雄の黒毛の狼そして、月光と名付けられた雄の赤毛の狼たちは犬ではなく、ホンモノの野生の狼。本作はミーシャだけではなく、これらの狼もオーディションで選ばれたというからビックリ。映画の歴史は110年を経ているが、狼のオーディションをやったのは、世界初？

そんな競争を見事に勝ち抜いた3匹の狼たちは、同じくオーディションを勝ち抜いたマチルド・ゴファールと共に、さてどんな演技を？

ミーシャはなぜ一人で旅に？

映画前半は、オランダのアムステルダムに住んでいたアンネ・フランクと同じように、ベルギーの首都ブリュッセルに住み、ナチスドイツによるユダヤ人狩りから必死に逃れようとしているミーシャたち家族の姿が描かれる。

ミーシャは、父親のロイヴン、母親のゲルーシャの愛をいっぱいを受けて育っているものの、極端に自由を束縛された現在の世界から飛び出したいと願い、いつもイライラしていたが、それは仕方ないところ。そんな状況下、遂にある日両親が連行されてしまったミ

ーシャは、支援者たちのネットワークによってベルギー人夫婦の子供として育てられることになったが、ミーシャはこのヴァル夫人（アンヌ・マリー・フィリップ）が大嫌い。それはなぜ？それはともかく、ミーシャが本当に仲良くなったのは、ミーシャが食料品の買い出しに行く田舎の農場のおじいさんのエルネスト（ギイ・ブドス）とおばあさんのマルト（ミシェル・ベルニエ）だ。

ここで面白いのは、農場で飼われていたパパ・イタとママ・リタという名前の2匹の見どころな大型犬とミーシャが仲良くなってしまうこと。どうも、これが『ミーシャ ホロコーストと白い狼』というタイトルの物語に発展していく伏線らしいから、ここにも注目！しかし、今やナチスドイツの魔の手はそんな田舎の農場にも伸び、エルネストとマルトも連行されてしまったから、何とか連行こそ免れたものの、ミーシャは今や独りぼっち。そんな中、ミーシャはエルネストからもらった小さなコンパスを頼りに、両親がいるはずの東に向かって一人旅立つ決心を。しかし、その旅には一体どんな苦難が？

ミミズは？猪の生肉は？

五味川純平の原作を小林正樹監督が全6部で映画化した名作『人間の条件』の第5部、第6部は、ソ連軍の猛攻の前にもろくも破れ去った樵夫たちが「死の脱出」から「曠野の彷徨」へと向かう姿を描くもの。満州への道中、密林で民間人のグループと出会った樵夫たちはこれを見捨てることができず同行するが、それによって更なる試練が。その最大の試練が食べ物。日本軍が1944年3月8日から7月3日までに行ったインパール攻略作戦における「死の行軍」においては、日本軍は人肉さえも食べたという話が伝えられているが、さて樵夫たちは？

他方、本作にみるミーシャの東への一人旅は小さなコンパスのみが頼り。そんな旅では、食料は人家があればそこから盗めばオーケーだが、森の中をさまよいつく時は？そんな視点でみると、本作には衝撃的なシーンが2つある。それは第1に、土の中をモゾモゾとはい回っているミミズをみつけたミーシャが、これをつかみ取りムシャムシャ食べるシーン。そして第2は、森の中でミーシャが友達となりパパ・イタと名付けた黒い狼と、ママ・リタと名付けた白い狼が殺した猪の肉を、パパ・イタ、ママ・リタたちと一緒に血をしたたらせながら食べるシーン。今の日本では、「そんな汚いものを！」となるはずだが、生きていくためには……。こんな厳しい演技に挑んだ8歳の少女マチルド・ゴファールに脱帽だが、プレスシートを読むと、実は実際の撮影では……？

感受性豊かな子供たちにこそ、是非こんな映画を！

目下ニッポン国は、2009年6月7日（日本時間8日）に第13回バン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した盲目のピアニスト辻井伸行氏の話で沸き返っている。そんな中、2009年6月16日朝のNHKニュースでは、辻井伸行氏の弾くショパンの

『黒鍵』と『革命』の2曲も聴くことができたから大満足。小さい時からおもちゃのピアノに親しんできた彼が本格的にピアノの練習を始めたのは4歳の時かららしいが、目が見えない分、彼の記憶力や聴力そして集中力は健常人とは違うケタはずれの能力をもっているらしい。もっともそれは、感受性の鋭い子供時代に厳しい練習をくり返したおかげ。

『ライフ・イズ・ビューティフル』では、「これはゲームだよ」「隠れていると点がもらえる。1000点集めたら戦車がもらえるんだ。だから絶対見つかったらダメだよ！」と子供に嘘をついて、収容所の生活を生き延びようとする親子の姿が感動的なドラマとして描かれていたが、本作は両親を探し求めて狼と共に森の中で生活するミーシャという少女の生きざまそのものが感動的なドラマ。大人の目からそんなミーシャを観て感動を覚えるのは当然だが、そこには例えば歴史的な背景などが入ってくる。また、「どうせ両親は殺されているはずだから、一人で東へ行っても何の意味もないのでは」などの邪念が入ってくるが、子供の目で本作を観た場合はどうだろうか？

うすうす両親を探すために旅に出たことはわかって、森の中をさまよい歩くシーンが続くうち、子供の目には狼と暮らすミーシャの姿が楽しそうにみえてくるかもしれない。さらには、自分も狼と一緒にあんな暮らしをしてみたいと思うかもしれない。もちろんそんな気持ちを持ったとしても、大人になればそれがバカげた気持だったとわかるはずだが、大切なことは何でもいからその時、その瞬間に感じとる力。そういう意味では徹底的にミーシャを主人公とし、白と黒と赤色の狼を助演者とした本作は、感受性豊かな子供たちこそ是非鑑賞してもらいたいものだ。

2009(平成21)年6月16日記

弁護士って正義の味方？それとも？

かつてよく観たアコムやプロミス、レイクや武富士など消費者金融のCMはここ数年で激減。代わって近時、債務整理と過払金が返還できるかも、とを謳ったCMが目立っている。払いすぎた借入金の利子を業者から取り戻す過払金返還請求事件を担うのは弁護士や認定司法書士だが、彼らは困った人々を救う正義の味方？

もともとそれはかなり怪しかったが、09年10月21日国税庁は、税務調査

の結果697人が報酬の申告漏れで、その総額は79億円に上ると発表した。平均すると一人当たり984万円だから、相当な金額だ。利息制限法に引き直した計算式で過払金の返還請求ができることを最高裁判所が認めてから、この手のビジネスが一部の弁護士や司法書士に流行したわけだが、こんなひどい実態をみると、弁護士って正義の味方？それとも？

2009(平成21)年11月5日記